

聖書箇所： 第2コリント 12：7-10

- 7b：そのために私は、高ぶることがないようにと、肉体にひとつのとげを与えられました。それは私が高ぶることがないようにと、私を打つための、サタンの使いです。
- 8：このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。
- 9：しかし、主は「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。
- 10：ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

メッセージ骨子：

<序論> レミゼラブルのジャンバルジャンは、子供の時にパン一個を盗んでしまったことでそれからの人生が狂ってしまいましたが、私達の人生にも「あのことさえなかったら」という事件が、一つや二つはあるのではないのでしょうか。その中には自分自身の失敗によるものもあれば、降って沸いたような災難もある。しかしそんな過去の、どう見てもマイナスとしか思えないような出来事も、長いスパンで見るとプラスになって帰ってくるのだと聖書は言っています。それは何がどうなってプラスに転じるのでしょうか。

<ポイント1> マイナスによって「とりなし手があたえられる」

パウロは7節で「肉体にひとつのとげが与えられた」と表現していますが、これは目の病気を指しているものと推測されます。それはキリストに出会った直後「目が開いていたのに何も見えなかった」（使徒9：8）「サウロの目からうるこのようなものが落ち、目が見えるようになった」（使徒9：18）という記述があるためですが、パウロは「それは私を打つサタンの使いだ」と表現するほどに、その病に苦しみました。聖書の手紙がほとんど口述筆記だったのもそのためですが、周囲の人々はこの公然の事実であった彼の眼病と伝道の働きのために、とりなしの祈りを熱心に捧げたと思われま

<ポイント2> マイナスによって「高ぶりから解放される」

CSルイスは『キリスト教の精髓』という本の中で「最大の美德は謙遜で、最大の罪は傲慢。傲慢は比較が全てであり、対人のみならず、神に対する敵意でもある。サタンがサタンになったのもそのためだが、それが一旦心に巣食うと、将来の愛や満足の可能性まで食い尽くしてしまう。」と言っています。そしてパウロ自身が、短い7節の中で二度も「私が高ぶることがないように」とこの「とげ」の存在する意味と必要性を告白していることから、パウロが「過去の高ぶった自分」を省みつつ、自分の心に再び「高ぶり」が芽生えることに対し、強く警戒していたことが伺えます。

<ポイント3> マイナスによって「神に目を向けるようになる」

私達の信仰人生には、いくら祈っても答えられないことがあります。基本のルールは『罪を犯せば悲しみが来る。神に従えば祝福がある』ですが、人生にはその法則に当てはまらない「例外」があるのです。そしてそれをどう整理し受け入れていくかが、その人の『知恵』の問われるところとなるわけですが、たとえ分からなくても、いやわからない時こそ、神に顔を向け、信じ、仕え続けるところに最大の知恵があると聖書は語ります（ヨブ記42章）。マザーテレサは『人の反応を気にすることなく、あなたの最良のものを与え続けなさい。すべてはあなたと神との間の問題なのです』と言っています。神に標準をあわせた人生・・・なんと安定感のある、祝福に満ちた人生でしょうか。

<まとめ> ゴルフボールのでこぼこは、ボールの空気抵抗を抑えて飛距離を持たせるためにあります。もしピンポン玉のようにツルとしていたらあんなには飛ぶことはできません。私達は落ち込み、へこむことが多くあるけど、でもそれゆえに次の飛躍を手にすることができるのです。また私達の人生は真珠貝にたとえることもできます。痛いとげの周りに涙が固まって、それが長い間に輝く真珠となるのです。パウロは自分の弱さゆえに、とりなし手を得、高ぶりから解放され、神に目をむけることで一層輝くことができましたが、私達も、自分の傷口から目をそらすことなく、主にそれを癒していただき、弱さゆえに強くしていただいて、イエス様に似た愛の人に変えていただきたいものです。

『神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。』（ローマ6：28）